

偕行現代考

「偕行」とは どんな意味か？

編集委員会

偕行社について、志村泰元氏（陸自

65）は、『偕行』8月号で「広辞苑によれば」として左の個所を引用し、「戦後の偕行社は存在しないことになってい」と指摘された。

「旧軍の現役将校および相当官を社員として相互扶助や親睦事業・教育研究事業などを行った団体。1877年（明治十年）創立。第二次大戦後解散」

一級の辞書にしてこの程度である。では「そもそも『偕行』とはどんな意味なのか？」『広辞苑』（三版）によれば、次の記述が盛られる。

「偕行」（詩経秦風） いっしょにいくこと。これでは、誰が、どんな目的で、いつ、どこにいくか、わからない。

そこで、偕行社の調査員大東信祐氏（陸自57）、博学の塚田勝郎氏（東幼49）、『偕行』の生き字引・渡部女史に知恵を借り、典拠を探した。

彼らが教えてくれたのは、それを解く鍵が（詩経秦風）にあることだった。そしてそれは、日本詩経学会の『詩経研究第42号（1999年12月号）』

に掲載され、渡部女史が所蔵していた。

その中に、「偕行社」の起源や事業に続き、村山吉廣教授による偕行社の命名と、その意味が記述されていた。

以下、要点のみ抜粋するが、一部を読みやすさから新字新仮名にした。

偕行社の創立は明治10年にさかのぼる。元々、陸軍将校の親睦共済・学術研究団体であった。はじめ陸軍当局主導の官製組織であり、大正13年に財団法人になった。

明治13年2月、陸軍士官学校講堂で偕行社創設三周年記念会が催された。

その席で当時陸軍軍医総監・子爵石黒忠憲が「偕行と名付けられたのは西周（にしあまね）先生で、詩経の無衣（ふい）の篇の第3章「豈曰無衣 與子同裳 王于興師 脩我甲兵 與子偕行」から選ばれた」と伝えている。

西周は、石見国（島根県）津和野の人。医家から儒学に転じ、藩校養老館の教授になったが、後に蘭学に転じ、幕府使節としてオランダに渡り、ライデン大学に学んだ。維新後J・S・ミルのA system of Logicによる倫理学書Philosophy of「哲学」と訳したことなどで名高い。学者・啓蒙思想家として知られるが、文官ながら16年にわたり兵部省（のち陸軍省）に出仕し、軍閥の官制・条例の整備に多大の貢献を

している。

西周が典拠とした「無衣」は詩経「秦風」に収められている。疊詠体で三章あり、出典の文字は第三章の末句にある。全詩を先師目加田誠先生の訳（一部分）と共にかかげておく。

豈曰無衣 豈に衣なしと曰はんや
衣がないとは言うまいぜ
與子同袍 子と袍を同じくせん
二人で着ようこの袍
王于興師 王ここに師を興さば
王が師を出しませば
脩我戈矛 我が戈矛を脩め
この戈矛とつてうちみがき
與子同仇 子と仇を同じうせん
二人で敵に向おうぜ
豈曰無衣 豈に衣なしと曰はんや
衣がないとは言うまいぜ
與子同澤 子と澤を同じくせん
二人で着ようこのなれ着
王于興師 王ここに師を興さば
王が師を出しませば
脩我矛戟 我が矛戟を脩め
この矛戟とつてうちみがき
與子偕作 子と偕に作さん
二人でやろうぜその時は
豈曰無衣 豈に衣なしと曰はんや
衣がないとは言うまいぜ
子と裳を同じくせん
二人で着ようこの裳

王于興師 王ここに師を興さば
王が師を出しませば

脩我甲兵 我が甲兵を脩め
甲兵うちそろえ
與子偕行 子と偕に行かん
二人で行こうぜその時は

この詩は、兵士たちが同じ衣を共有し甘苦を分かちあい、ともに敵と戦おうという戦場での友愛の歌である。

「偕行」の「偕」は「偕老同穴」「偕楽園」の「偕」と同じく、「ともに、一緒に」で、英語のgatherに当たる。「偕行」は「人と共に行く」「同伴する」意である。明治期の「戦友」（こはお国を何百里）と同じく秦国の軍歌の一つだったろう。

以上で、抜粋を終わる。

古今東西、出征する兵士や出陣する部隊を鼓舞する歌・歌詞は多い。その中で有名なのが、フランス国歌の『ラ・マルセイーズ』である。

その一番の歌詞は次のとおり。
行こう祖国の子らよ
栄光の日が来た！
われらに向かつて暴君の
血まみれの旗が掲げられた
血まみれの旗が掲げられた
聞こえるか戦場の

残忍な敵兵の咆哮を？

奴らは汝らの元に来て

汝らの子と妻の喉を掻き切る

武器をとれ市民らよ

隊列を組め

進もう進もう！

汚れた血が

われらの畑の畝を満たすまで！

もとは、フランス革命時の歌だが、現在の憲法も『ラ・マルセイエーズ』を国歌と規定している。

「パリ同時多発テロ」が起きた2015年には、「フランスとパリ市民との連帯」をあらわすため、『ラ・マルセイエーズ』が演奏され、市民の共感を得て大合唱となった。国民団結の歌であり、追悼の歌でもあった。

国防に關係した我々にとって、「偕行」の意味は非常に重い。内には自然災害が多発し、外からは国難が迫っている。武器は執らずとも、「偕行」の心意気で現代の「防人」をお手伝いしたいものである。

編集委員会 『偕行』の知恵袋であり、元編集委員の塚田勝郎様が永眠されました。慎しんでご冥福をお祈り申し上げます。